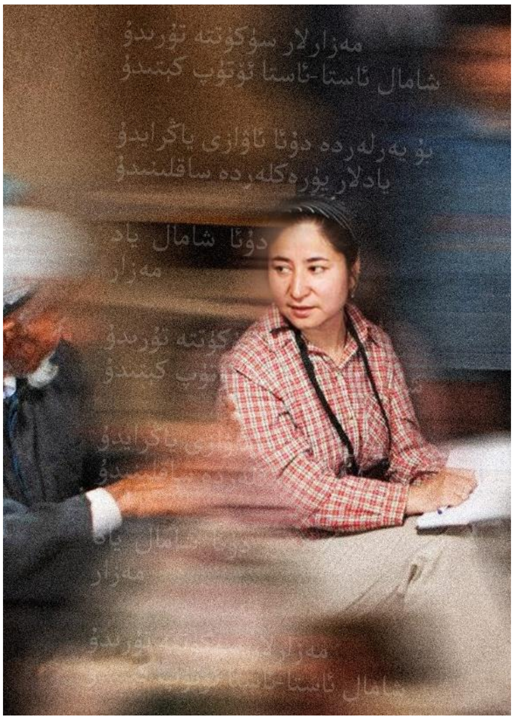


ラヒレ・ダウトのフィールドは永久に失われてしまった

WOMEN 我们　Mar 16, 2026　掲載　　原文　https://women4china.substack.com/p/rahile-dawut
執筆｜麦丢替（マイ・ディウティ）
編集｜于長夜（ユ・チャンイェ）　　プラットフォーム編集｜覃山（タン・シャン）

1966 年 5 月、ラヒレ（Rahile Dawut 熱依拉・達吾提）はウルムチの知識人家庭に生まれた。イデオロギーによる厳しい検閲と、ウイグル族としての幾重もの困難に直面するなかで、彼女の一族は「柔軟な」姿勢で安定した生活を求める術をとうの昔に身につけていた。ただ、彼女にはウイグル文化を記録に残したいという、ささやかな、しかし切実な願いがあった。2017 年、彼女が「国家安全危害罪」により無期懲役の判決を下されていた事実は、それから 6 年が経過した後にようやく人権団体「対話基金」によって明らかにされた。それと同時に、2016 年から 2018 年にかけて吹き荒れた一斉検挙の嵐の中で、彼女と共に数百名ものウイグル人学者が姿を消している。



ラヒレ・ダウト（Rahile Dawut）は人類学者であり、新疆大学の民俗学教授である。彼女はその学術キャリアの多くを南ウイグル地区でのフィールドワークに捧げ、イスラム文化の影響下にある「聖者の墓」への参拝民俗である「マザール（mazar）」の研究に取り組んできた。

ラヒレは 2017 年に消息を絶った。「国家安全危害罪」により彼女に無期懲役の判決が下されていた事実は、それから 6 年が経過した 2023 年 9 月、人権団体「対話基金」によってようやく明らかにされた[1]。同時に、2016 年から 2018 年にかけて吹き荒れた一斉検挙の嵐の中で、彼女と共に数百名ものウイグル人学者が消息を絶っている。

ラヒレの失踪から 8 年が経った 2026 年の全国人民代表大会・中国人民政治協商会議の開催期間中〔3 月 4 日～11 日〕、全国人民代表大会において『民族団結進歩促進法』が審議・可決された[2]。この法律は、過去 10 年間にわたり実施されてきた民族・宗教政策を法的な形でさらに強固なものとし、各民族が多様性から一体へと集約される「中華民族共同体」の構築を強調している。その内容には、教育や公共管理の場における漢字・中国語の優先使用や、統一規格化された「中華文化」の推進などが含まれる。その結果、個別の民族文化が持つ伝統の多様性や歴史の長さ、独自性を強調するような学術・思想活動は、今後より明確な制限を受ける可能性がある。

[1] https://www.hrw.org/zh-hans/news/2023/09/22/chinese-court-imposes-life-sentence-uyghur-scholar
[2] http://www.npc.gov.cn/npc/c2/kgfb/202603/t20260306_452203.html

10 年が経過した今も、アキダ・プラット（Akida Polat）は母と過ごした最期の時間を鮮明に覚えている。

それは 2016 年だった。新疆大学の教授であった母ラヒレ・ダウトは、中国当局の基金から助成金を得て、米シアトルのワシントン大学へ半年間の客員研究員として赴いた。当時、同じ大学の大学院に在籍していた娘のアキダに寄り添い、彼女の卒業式にも出席した。

アキダの回想によれば、ラヒレは帰国後に当局の厳しい審査を受けることになるだろうと予見していたという。そのため、アメリカ滞在中も彼女はただ一心に自らの研究に打ち込み、外部との交流をほとんど絶っていた。かつての同級生たちに連絡を取ることさえ、あえて避けていたという。



2016 年、ワシントン大学。修士課程の卒業式に出席したアキダ・プラット。写真は母ラヒレ・ダウトが撮影（写真：Bitter Winter）。

その当時、ラヒレはまだ未来が明るいものであると信じていた。2016 年の夏、キャンパス沿いの川辺を親子で散歩していたとき、ラヒレはいつもアキダに「中国に帰ってキャリアを築くように」と勧めていた。「母はいつも私に帰ってきてほしいと言っていました。私は一人っ子でしたから、母は私が異郷で漂流するような生活を送ることを望んでいなかったのです」。アキダの目には、当時のラヒレが政府に対して「過度な」信頼を寄せているように映った。

アキダは幼少期、ラヒレによって漢語（中国語）クラスに入れられたが、ウイグル語の学習も疎かにされることはなかった。彼女は母に、実務経験を積むため、あるいはそのまま博士課程に進むために、もう少しアメリカに滞在させてほしいと懇願した。娘を説得しきれなかったラヒレは、結局ひとりで新疆へと戻ることになり、2016 年の秋、シアトル・タコマ国際空港からアメリカを後にした。

ラヒレもアキダも、太平洋の向こう側で待ち受けていたのが、新疆の教育・文化界の知識層を標的にした「一斉検挙の嵐」であろうとは、夢にも思っていなかった。

突如として消息を絶った人文科学の教授たち

嵐が近づいていることを告げる予兆は、友人からもたらされた悪い知らせだった。

2016 年 10 月 6 日、54 歳のヤルクン・ロジー（Yalqun Rozi）が、ウルムチの自宅から警察によって連行された。連行当時、ヤルクンは新疆教育出版社のシニアエディターを務めていた。彼はラヒレの夫であるハイウィズラ・プラット（Hiwizulla Polat）の同級生でもあり、両家は家族ぐるみの深い付き合いがあった。アキダとヤルクンの子どもたちは、共に育った幼馴染だった。ヤルクンは後に「国家政権転覆扇動罪」に問われ、懲役 15 年の実刑判決を言い渡された[3]。



ヤルクン・ロジー。元新疆教育出版社シニアエディター。2016 年 10 月に拘束され、2018 年 1 月に「国家政権転覆扇動罪」で禁錮 15 年の判決を受けた（写真引用：The Uyghur Human Rights Project）。

AP 通信の報道によれば、ヤルクンと共に出版社の同僚数名も姿を消したという。これらの一斉検挙は、編集者らが携わったウイグル語教材の編纂・審査に関連していた。彼らが手掛けた教材には、ウイグルの古典詩や民話が盛り込まれており、生徒たちにウイグル人としての誇りを持つよう促す内容が含まれていた。

その数ヶ月後、新疆大学で最初に衝撃に見舞われたのは、あるウイグル人の学長だった。2017 年 3 月 31 日午後、新疆大学は当時の学長兼党委員会副書記であったタシポラット・ティップ（Tashpolat Tiyip）の全役職を解任すると発表した。その後、タシポラットは 2017 年 5 月、学術会議に出席するためドイツへ向かおうとしていた北京の空港で警察に連行された。同行していた数名の大学院生も同時に拘束された[4]。

タシポラットは乾燥地帯研究の専門家で、80 年代に国費留学生として日本の東京理科大学で博士号を取得した、中国初のウイグル人工学博士である。この学長は、政府の民族政策に対して一度も異議を唱えたことはなかった。しかし、当局が特定の対象向けに放映した政治教育ビデオの中で、彼は「分離主義」の罪に問われた他の 5 名のウイグル人と共に登場し、「裏表のある人間」と呼ばれた。彼は執行猶予 2 年付きの死刑判決を下された。[5]

2017 年、新疆大学の人文学部では修士学位の要件が突如変更され、すべての学生は中国語で書かれた論文のみを提出するよう求められた。そのため、ラヒレは 2 人の修士課程の学生のために 6000 人民元（約 12 万円）を支払い、彼らの論文をウイグル語から中国語に翻訳するのを手助けした[6]。学生に資金援助を行い、南ウイグル地区でのフィールドワークへ送り出すことは、彼女にとって日常的なことだった。

---

[3] https://apnews.com/article/4f5f57213e3546ab9bd1be01dfb510d3

[4] https://www.lemonde.fr/international/article/2018/11/09/en-chine-l-intelligentsia-ouigoure-ciblee-par-une-purge-massive-et-sans-precedent_5381201_3210.html?utm_source=chatgpt.com

[5] https://www.rfa.org/english/news/uyghur/execution-09102019175637.html

[6] https://madeinchinajournal.com/2023/11/13/rahile-dawut-a-lifetime-passion-that-ended-with-a-life-sentence/

しかし、2017 年の夏になると、ラヒレは学生の翻訳費を肩代わりするだけでなく、フィールドワーク中に拘束された学生たちを救い出すために警察署へも足を運ぶようになった。ある学生の回想によれば、ラヒレは警察に対し「学生たちはただ文化の研究をしているだけで、政治とは無関係です」と告げたという。この新疆大学教授による身元保証によって、学生たちは釈放された。だが、それからわずか数ヶ月後、ラヒレ自身が自由を奪われることとなった。

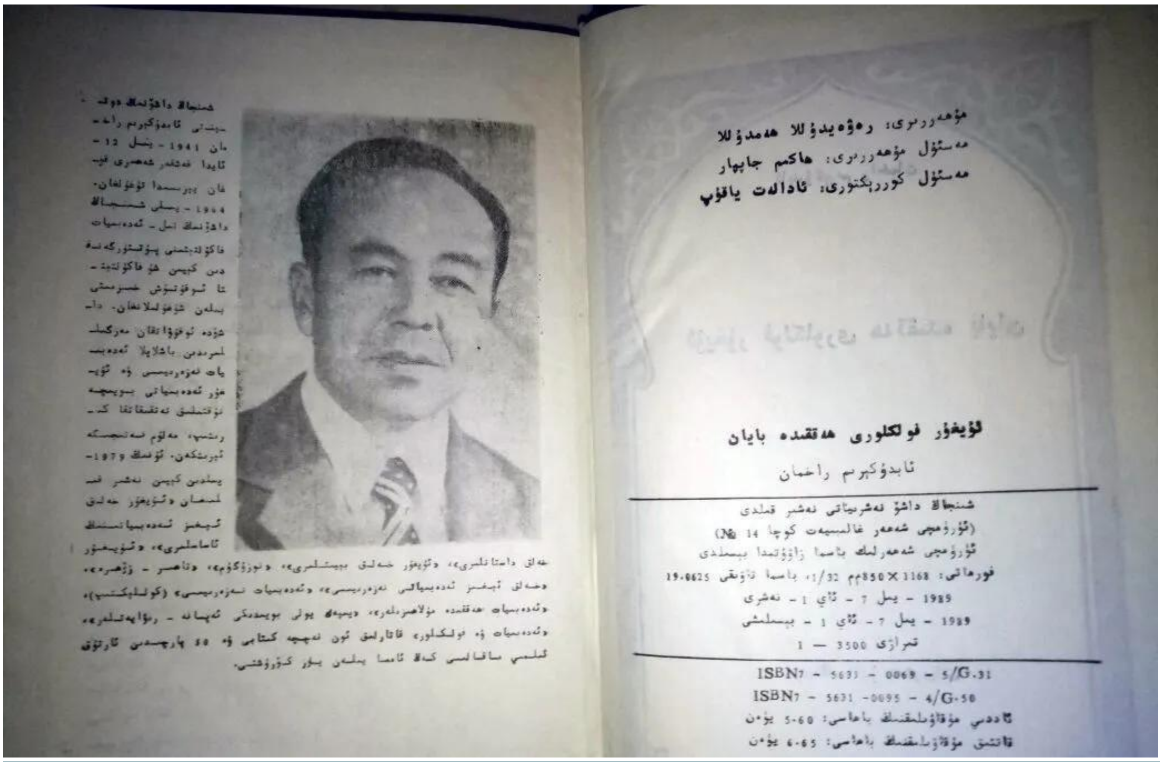
ある独立系の研究者が、2017 年のラヒレとの最後の面会について回想録を綴っている[7]。新疆大学の研究室で、ラヒレはフィールドワークで録音した音源のデジタル化作業に追われていた。当時、当局によるウイグルの宗教施設への破壊活動はすでに多発していたが、インタビューに応じたラヒレは、なおも希望を捨てていなかった。

「私たちは、何一つ失わせてはならないのです」と彼女は言った。「私たちはこの歴史の守護者であり、後世の子孫たちは、私たちがこれを保存することに頼っているのですから」。自著が書店から消え始めているという話題になっても、彼女は「書店の流通システムに問題があるのでしょう」と楽観的な推測を口にした。

「彼女は最後まで情勢を見誤っていたのかもしれません。あるいは、本当は分かっていながら、あえて口にしなかっただけなのかもしれません」。ルース・イングラム（Ruth Ingram）という仮名を用いたこの研究者は、そう記している。

2017 年 12 月 12 日、ラヒレに「緊急会議」に出席するため北京へ向かうよう通知が届いた。彼女が北京行きの飛行機に乗り込んだ後、その消息はぷっつりと途絶えた。

それから 1 ヶ月も経たない 2018 年 1 月、ラヒレの大学院時代の指導教官であった 77 歳の文学教授、アブドゥケリム・ラフマン（Abdukerim Rahman）が国家安全当局に連行された。ラフマンはウイグル民俗学研究の礎を築いた人物である。1960 年代から重い録音機を担いで各地のフィールドを歩き回り、口承で伝えられてきたウイグル民族の歌謡や文学を記録し続けてきた。他のチュルク系民族と同様、口承はウイグル文化を継承する主要な手段であり、ラフマンのフィールドワークに対する情熱は、教え子であるラヒレにも受け継がれていた。



アブドゥケリム・ラフマンが 1989 年に出版した『ウイグル民間文学概論』の扉絵（The Art of Life in Chinese Central Asia）。

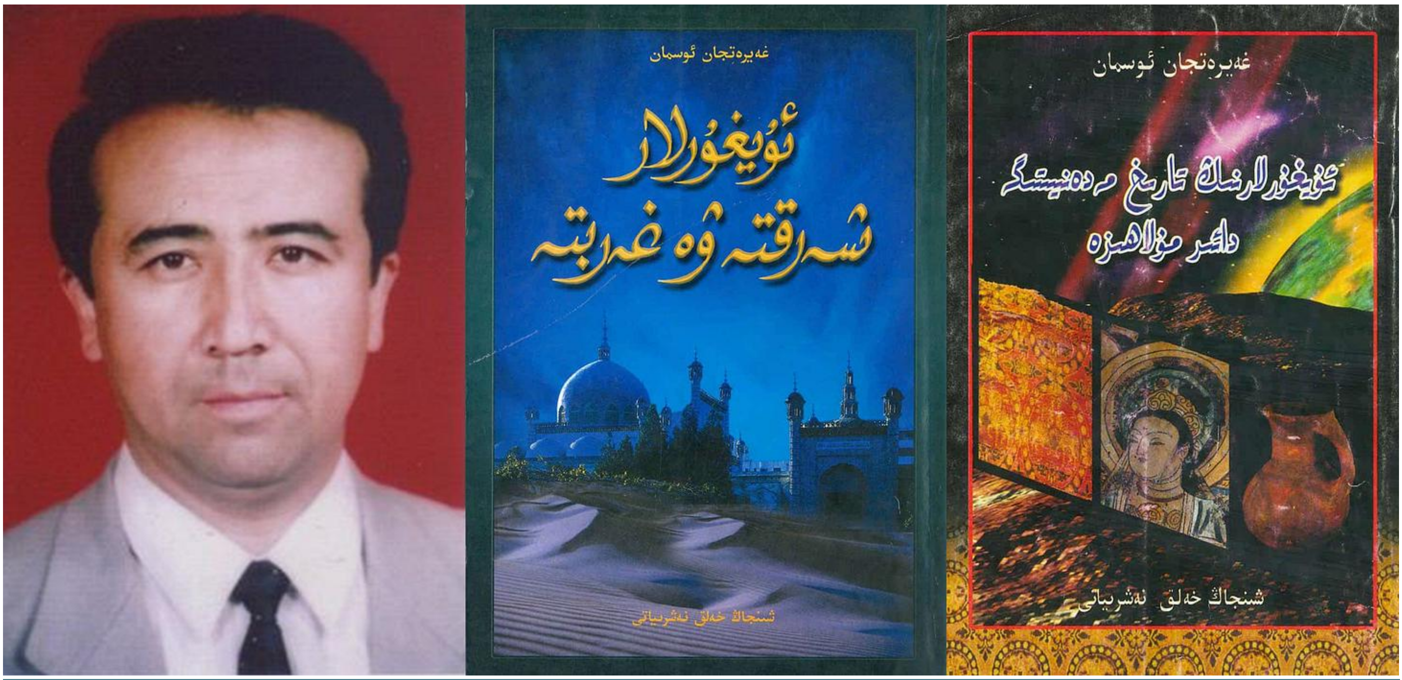
文化大革命の時代にラフマンは投獄され、多くの研究資料を失っていた。彼が民俗学研究を再出発できたのは、ようやく 1980 年代になってからのことだった。しかし現在、ラフマンはこの「新時代」の災禍を切り抜けるこ

[7] https://thechinaproject.com/2023/09/28/outrage-at-chinas-life-sentence-of-uyghur-folklore-scholar-rahile-dawut/?utm_source=chatgpt.com

とはできなかった可能性が高い。複数の海外メディアの報道によれば、彼は 2020 年８月、拘留中に死去したという[8]。2017 年から 2018 年にかけて集中的に拘束されたウイグル人学者の中には、ラフマンのような長老も少なくなかった。拘留中に死亡したと報じられた人物には、82 歳の宗教学者ムハンマド・サリフ・ハジム（Muhammad Salih Hajim）も含まれている[9]。彼は『コーラン』を初めてウイグル語に翻訳した学者だったが、拘束されてから 40 日余りで息を引き取った。

2018 年 1 月にラフマンと共に拘束されたのは、文学教授で古典ウイグル文学研究者のゲイレジャン・ウスマン（Gheyretjan Osman）、そして元文学教授であり、新疆大学の元副学長、新疆文芸協会主席を務めたアザット・スルタン（Azat Sultan）である。

ウスマンは 1978 年に新疆大学ウイグル語学部に入学して以来、30 冊以上の専著と 100 本以上の学術論文を執筆し、新疆大学のウイグル語文学のカリキュラム作成や教材編纂に多大な貢献を果たしてきた。2021 年半ば、ウスマンの拘禁から３年が経過してようやく、彼の家族は彼が「分離主義」の罪に問われ、禁錮 10 年の判決を受けたという知らせを受け取った。[10]



文学教授であり古典ウイグル文学研究者のゲイレジャン・ウスマン。『東西のウイグル人』（2002 年３月出版）、『ウイグル歴史文化論集』（2003 年７月出版）など 30 冊以上の専門書を執筆した（写真引用：Uyghur Hjelp Project）。

スルタンは、かつて官職に就いていた他のウイグル人学者と同様に、「裏表のある人間」として告発された。[11]

1 ヶ月後の 2018 年 2 月、元新疆大学言語学教授で人文学部長も務めたアルスラン・アブドゥラ（Arslan Abdulla）が警察に拘束された[12]。彼は 2010 年に出版された『現代ウイグル言語』の編著者であり、これはウイグル語の重要な標準教材となっている。

ウイグルの教育人文学分野の教授たちと共に、その教え子たちも姿を消した。2018 年 11 月 8 日時点の『迫害を受けたウイグル知識人エリート名簿』には、ラヒレ・ダウトを筆頭に、大学出身のウイグル人知識人 124 名の名前と、キルギス人・ウズベク人らの知識人 4 名の名前が記載されている[13]。彼らはいずれも 2016 年以降に「失踪させられた」人々だ。また、「WOMEN（我門）」が確認した、亡命ウイグル人学者アブドゥウェリ・アユプ（Abduweli Ayup）が 2022 年 12 月に整理した『2016 年以降に中国で拘禁されたウイグル人知識

[8] https://livingotherwise.com/2018/10/02/abdukerim-rahman-surviving-without-books/
[9] https://www.rfa.org/english/news/uyghur/scholar-death-01292018180427.html
[10] https://uyghurhjelp.org/2023/08/who-is-gheyretjan-osman/
[11] https://www.rfa.org/english/news/uyghur/professor-09242018164800.html
[12] https://www.scholarsatrisk.org/report/2018-02-01-xinjiang-university/
[13] https://www.chinaaid.net/2018/11/blog-post_84.html

人名簿』には、すでに 435 名の名前が記されていた[14]。彼らは新疆大学、カシュガル大学、新疆師範大学、新疆医科大学など新疆各地の大学、あるいは新疆教育出版社や新疆人民出版社などの出版社に所属しており、作家、詩人、記者も含まれている。さらに、数百名に及ぶウイグル人の医師やエンジニアもその中に含まれている。

ウイグル人の拘束にあたっては、密室化された情報管理システムと、法治の枠組みを逸脱した法執行が運用されている。中国の『刑事訴訟法』は、警察が容疑者を拘束する際の法的正当性を規定しており、捜査令状や逮捕状の提示、容疑者および家族への通知義務などが定められている。しかし、ウイグル人が拘束される際、家族の知る権利が保障されることはない。

ラヒレは突如として連行され、彼女がどこへ行ったのか誰も知る由もなかった。海外メディアはおろか、親族でさえ失踪の経緯を裏付けることができなかった。中国国内では「根も葉もない噂」ですら広まることのない、徹底した情報統制が敷かれていた。

知識人への集中的な検挙が行われていた時期、新疆師範大学にはウルムチの知識人のための「専用拘留センター」が設けられていたという情報もある[15]。彼らはまずそこに拘留され、その後に司法機関の拘置所へと移送されたという。

知の生産活動そのものが罪と見なされるとき、捕らえられるのはウイグル人だけではない。2025 年 8 月 23 日、NGO 団体「中国の人権（Human Rights in China）」は、ラヒレの教え子であった漢族の学生、馮斯瑜（フォン・スーユー）が 2018 年に懲役 15 年の実刑判決を受けていたことを明らかにした。1994 年 11 月生まれの馮は、ウイグル語を流暢に操り、2018 年初頭に拘束される直前には博士課程の研究を開始しようとしていた。2017 年 2 月、彼女は新疆大学民俗研究センターを訪れ、当時センター長を務めていたラヒレ・ダウト教授と共同研究を行っていた。馮の同級生の一人によれば、彼女は浙江省金華市の出身だという。両親は地元で鍼灸院を営んでおり、その診療所は地元の公立中医病院（漢方病院）の傘下にある。娘に災いが降りかかってからの数年間で、この老夫婦の髪はすっかり白くなってしまったという。



新疆大学民俗研究センターの「ウイグル女性民俗文化」研究者である馮斯瑜（フォン・スーユー）。教授であるラヒレ・ダウトと同じ事件に連動して起訴された。2018 年、ウルムチ市天山区法院（裁判所）は「国家安全危害」などの罪名により、馮に対し懲役 15 年の秘密判決を下した。刑期は 2033 年 1 月までとなっている（写真引用：ネットワーク）。

北京への出張途上での失踪

[14] https://www.voachinese.com/amp/dilemma-of-uyghur-intellectuals-in-china-20231003/7295387.html

[15] https://www.rfa.org/mandarin/zhuanlan/jieduxinjiang/xj-08202021135254.html

2017 年 12 月 12 日は、アキダの人生において本来なら平穏な一日となるはずだった。彼女はワシントン大学のある教授の研究室を訪れ、博士課程について相談していた。その後、ラヒレに WeChat（微信）で電話をかけたが、受話器から聞こえてきた母親の声はひどく急いでいる様子だった。

「母はとても焦っているようでした。あまり時間がなさそうな感じだったんです」。8 年が経過した後の深秋、アキダは今もあの瞬間を鮮明に思い出すことができる。ラヒレはこれから北京へ向かうところだと告げ、「着いたら電話するわ」と言い残した。それが、別れの前の一言となった。



海外に身を置き、母ラヒレのために奔走し声を上げ続けているアキダ・プラット（写真引用：Kashgar Times）。

ウルムチから北京への空路は約 2800 キロメートル、飛行時間は約 4 時間。しかし、アキダのもとにラヒレからの折り返し電話が届くことはなかった。墜落事故を心配するアキダに対し、ビデオ通話に出た父親は「お母さんは今忙しい。状況が少し複雑で、北京での仕事が長引いているんだ」と告げた。ウイグル人の WeChat（微信）は厳重に監視されている。アキダは当時の父や親族たちの表情を思い返し、彼らが自分を守ろうとしていたのだと感じている。

2014 年末から海外へ亡命したアブドゥウェリ（Abduweli Ayup）は、拘束されたウイグル人知識人の情報の収集に尽力してきた。2016 年、旧知の友人であるラヒレの失踪を知った彼は、北京や蘭州にいる彼女の教え子たちに連絡を取り、何が起きたのかを突き止めようとした。彼はビデオインタビューの中で手を挙げ、自分の首をさっと横に切る動作をしてみせた――これが、当時当局側にいたある教え子から得られた最初の「回答」だった。

「その人はラヒレの名前を口にすることさえ恐れ、ただこのジェスチャーをしました。その時の私は、一体どういう意味だろうと不思議に思ったものです」。2023 年 9 月 21 日、中国の政治犯を支援する慈善団体「対話基金」が、中国当局者が作成した文書に基づき、ラヒレ・ダウトに無期懲役の判決が下されたことを確認したと発

表した[16]。アブドゥウェリが、数年前のあのジェスチャーが意味していた事の重大さを悟ったのは、その時だった。

対話基金によれば、高官が作成したその文書には、ラヒレ・ダウトが「国家安全危害罪」により無期懲役を言い渡されたことが記されていた。彼女は 2018 年に控訴したが、新疆ウイグル自治区高級人民法院（高裁）によって棄却されたという。

アブドゥウェリは、ラヒレとは学生時代からの知り合いだったと語る。ラヒレは 1990 年に新疆大学で民俗学の修士号を取得した後、そのまま大学に残って教鞭を執った。その後、「中国民俗学の父」と称される民俗学者・鍾敬文（ジョン・ジンウェン）に師事するため北京師範大学の博士課程に進み、1998 年 7 月に民俗学博士の学位を取得した。アブドゥウェリとラヒレが出会ったのは 1995 年の北京で、当時彼は学部生、ラヒレは博士課程の学生だった。

アブドゥウェリの目に映るラヒレは「穏健派」であり、中国の民族政策に対して一概に拒絶反応を示すような人物ではなかった。例えば 2000 年、中国政府が内陸部に「新疆クラス」を設置し、ウイグルの青少年を内陸部で学ばせる政策を打ち出した際、一部のウイグル人はこれを少数民族に対する同化教育だと捉えた。しかし、ラヒレは北京師範大学での講義の中で、この政策はウイグル人の教育水準を向上させるものだと説いていた。

民俗学者として、ラヒレは自らの研究に対しても常に多様性と寛容の視点を持ち続けていた。彼女のマザール（聖者の墓）巡礼に関する研究はフィールドワークの実践に基づいたものであり、この独自の文化的伝統がいかにしてウイグル人の日常生活を構築しているかを探求しようとした。ラヒレが 2009 年に発表した学術論文では、ウイグルのマザール信仰は単なるイスラムの宗教活動ではなく、自らの伝統に基づいて作り変えられたものであり、そこにはシャーマニズムの影響が特に顕著に見られると指摘している。[17]



ラヒレ・ダウトは一貫してウイグル人のマザール信仰の研究に尽力してきた。写真は 2005 年撮影（写真引用：Lisa Ross）。

---

16 https://cn.nytimes.com/china/20230925/rahile-dawut-uyghur-china/

17 https://edspace.american.edu/silkroadjournal/wp-content/uploads/sites/984/2017/09/Shrine-Pilgrimage-Among-the-Uighurs.pdf

ウイグル語において「マザール（mazar）」とは、通常、聖者の埋葬地、あるいは奇跡が起きたとされる場所を指す。ウイグル人によるマザール参拝の実践には、『コーラン』の朗読や祈り、生贄が含まれる。参拝者たちは大きな鍋で共に料理を作って食事を分かち合い、闘鶏に興じ、異性と出会う場ともなっていた。

このような墓地崇拝の行為には、イスラム教シーア派や神秘主義の伝統である「スーフィズム」（注）の要素が含まれている。しかし実のところ、こうした参拝行為は、近年に台頭したイスラム改革派や原理主義的な思潮からは（正統ではないとして）認められていない。ラヒレは、ウイグル文化におけるマザールの存続こそが、外来のイスラム教に直面した際にも土着の伝統が消失せず、融合と適応を通じて保持され、再構築されてきた証であると考えていた。

（注）スーフィズム（Sufism / al-Taṣawwuf）： イスラム教における霊的な修行、神秘主義、および禁欲主義的な傾向を指す。形式化された律法を超え、心の浄化、沈思黙考、瞑想（唱名など）、師匠による導きを通じて、人間と唯一神（アッラー）との精神的な結合と無私の愛を実現することを目指す。イスラム世界の民衆の間で広く親しまれている。

ラヒレの研究によれば、マザールは地理的に新疆の南部と東部に集中しているが、北部のイリ川流域にも分布している。一部のマザールは交通の要所に位置しモスクを併設しているが、砂漠の奥深くに位置するものもあり、土盛りや石積み、立てられた棒や色鮮やかな旗などによってのみ示されている。参拝者たちはマザールで自らの苦悩を吐露するが、そこでの女性たちの創造性は極めて際立っている。特に子宝祈願と深く結びついており、一部の地域では、出産や加護への願いを込めて「象徴的なゆりかご」や「人形」などの供物が捧げられている。



2010 年、イマーム・ハシム（Imam Hasim）マザールで祈りを捧げる参拝者（写真引用：Rian Thum / Made in China Journal）。

「なぜそれが『敏感な問題（政治的にデリケート）』とされるのか分かりません。これは単なる文化であり、母はただそれを保存したかっただけなのです」とアキダは語る。人類学者であるラヒレは、マザール文化に限らず、あらゆる異なる文化の研究に没頭していた。「文化がある場所なら、彼女はどこへでも行きました」。アキダの回想によれば、2016 年にワシントン大学へ客員研究員として赴いた際も、ラヒレはシアトル近郊のアメリカ先住民の部族研究に出向いていたという。

押しつぶされたマザール

アブドゥウェリの記憶では、2000 年代初頭、彼はカシュガルのマザールでの行事に参加したことがある。当時まだ若かった彼にとって、マザールの最大の魅力は、若者たちの「恋愛」を後押ししてくれる場所だったことだ。「大都市でのデートにはお金がかかりますが、砂漠のマザールの中なら一銭もかかりませんでしたから」。

ロンドン大学の民族音楽学教授レイチェル・ハリス（Rachel Harris）とラヒレ・ダウトが 2001 年に共同執筆した論文では、マザールが祭事における「聖なる空間」を提供していると指摘されている[18]。その空間では、曖昧な情事や賭博、大麻の吸引といった、ある種の「境界を越える行為」が許容されていた。論文には、カシュガルで最も高名なオルダム（Ordam）マザールの祭りの盛況ぶりが詳細に描かれている。人々は音楽に合わせて哀悼し、祈り、感情を爆発させ、次第に我を忘れてトランス状態へと入っていく。

この論文は、象徴的な空間の支配権をめぐる国家権力によるマザールの祭典への監視と抑圧に焦点を当てている。

オルダム（Ordam Padshah）マザールは、1000 年以上前にイスラム教と仏教が交戦した聖地である。当時、イスラム軍は敗北し、カラハン朝のアルスラン・ハン（Arslan Khan）が戦死した。彼の遺体は 300 人の殉教した戦士たちと共にその砂漠に埋葬され、後にオルダム・マザールとなったのである。



1928 年に撮影されたオルダム・マザール（写真引用：Frank Ludlow / 大英図書館）。

主要なマザールの聖地であるオルダム・マザールが、国家によって初めて禁止されたのは 1958 年の「反右派闘争」の時期だった。1980 年代に入り文化大革命が終結すると、オルダム・マザールはようやく再開され、全盛期には 1 日に約 2 万人もの参拝客を集めるまでになった。しかし 1990 年代以降、中国政府は「イスラム原理主義の拡散」や「ウイグル分離主義」を理由に――実際にはマザール信仰はイスラム原理主義から容認されていないにもかかわらず――再びマザールへの制限を開始した。そして 1997 年、オルダム・マザールはついに「一律禁止」の措置が取られたのである。

2015 年ごろ、作家の柴春芽（チャイ・チュンヤー）はオルダム・マザールの訪問を試みた[19]。彼がカシュガルとヤルカンド（莎車）の間に広がる荒野、イェンギサール（英吉沙）県の村の奥深くにたどり着くと、オルダム・マザールへと続く関所には鉄門が置かれ、鍵がかけられていた。地元住民の話によれば、1996 年にエイティガ

---

[18] https://xinjiangdocumentation.sites.olt.ubc.ca/files/2021/01/Mazar-festivals-of-the-Uyghurs-Music-Islam-and-the-Chinese-State1.pdf

[19] https://news.ifeng.com/mainland/special/xzbjx/chapter5.shtml#reach01

ール・モスク（Id Kah Mosque）のアルンハン・ハジ（Aronghan Aji）大ムッラー（導師）とその息子が、覆面をした「イスラム反対党」の幹部２名に暗殺される事件が起きた。警察がオルダム・マザールでその実行犯を拘束したため、それ以来、マザールへの道は封鎖されたままなのだという。

エイティガール・モスクはカシュガル地区における主要な宗教活動の拠点であり、殺害された大ムッラーたちは一貫してイスラム過激主義に反対する立場を取っていた。例えば、2014 年７月 30 日に暴徒によって殺害された 74 歳のジュマ・タヒール（Juma Tayir）大ムッラーは、「聖戦で殉教すれば天国へ行ける」という謬説を公に否定し、「理由なく人を殺めることは大罪であり、アッラーの厳罰を受けるべきことだ」と主張していた。

2018 年の衛星画像によれば、オルダム・マザールはすでに砂漠の中の廃墟と化している[20]。かつて千年前に仏教王国であったホータン（和田）地区にあるもう一つの有名な聖地、イマーム・ハシム（Imam Hasim）マザールも、今や荒れ果てている。2020 年６月の衛星画像では、現地のモスクが跡形もなく取り壊されているのが確認できる。



『ニューヨーク・タイムズ』によると、2018 年初頭の衛星画像ではオルダム・マザールとその周辺のモスク、礼拝堂、そして守護者たちがかつて暮らしていた質素な住居がすべて取り壊されていることが確認できる（Maxar Technologies による衛星画像）。

2018 年３月 10 日から 17 日の間に、新疆南部・ホータン地区のニヤ（民豊）鎮から約 75 キロメートル離れた高い砂丘の上に位置する、有名なイマーム・ジャファリ・サディク（Imam Je’firi Sadiq）マザールも撤去された[21]。このホータン地区のマザールは、破壊されるまで 450 年もの間、そこに存在し続けていた。

2017 年以降、ラヒレに代表されるウイグル民俗学者の拘束と時を同じくして、約 100 カ所以上のウイグル人のマザールや墓地が破壊された[22]。ブルドーザーがマザールに踏み込む理由はさまざまである。例えば 2018 年以降、マザールや墓地の取り壊しは「葬儀改革」と結び付けられた。2019 年には、ホータン市中心部のウイグル人の霊園が「都市開発」と「開放的な空間の確保」を理由に解体され、同年にイリ地区政府は、消防署の新設を理由に別の墓地を破壊した。

アブドゥウェリは、カシュガルの東湖のほとりにあったアルスラン・ハン（Arslan Khan）マザールが取り壊された後、地方政府がその跡地に湖畔を展望できる分譲マンションを建設したのを目の当たりにしている。彼がラヒレの教え子から聞いた話では、一部のマザールの守り人たちが強制撤去に際してラヒレに助けを求めたことがあったという。ラヒレは彼らに、政府による霊園の破壊は「違法である」と伝えていた。アブドゥウェリは、こうした彼女の態度が政府の目に「危害」と映ったのかどうか、確証を得ることはできていない。

---

20 https://cn.nytimes.com/china/20200929/xinjiang-china-religious-site/

21 https://madeinchinajournal.com/2020/08/24/the-spatial-cleansing-of-xinjiang-mazar-desecration-in-context/

22 https://madeinchinajournal.com/2020/08/24/the-spatial-cleansing-of-xinjiang-mazar-desecration-in-context/

文化が空虚な景観と化すとき

アキダは、母ラヒレのことを「骨の髄まで慎重な生存本能を備えたウイグル人」と形容する。ウイグル文化を研究する複数の関係者も、ラヒレの研究は決して「過激」なものではなく、彼女はただ勤勉な文化の記録者であったと口を揃える。

レイチェル・ハリスは、ある学術論文の中でラヒレのフィールドワークでの経験を側面的に記している[23]。2009年８月、このイギリスの民族音楽学教授はアクス地区シャヤ（沙雅）県を訪れ、現地の女性たちによる読経の儀式「khätmä（ハトマ）」に立ち会った。ある民家の客間に 60 人もの女性たちがひしめき合い、一人の村人女性に導かれて『コーラン』や神秘主義の詩を合唱した。３時間にわたる儀式の中で、女性たちは神に懺悔し、体を回転させ、揺らし、そして涙を流した。

むせ返るような熱気の部屋の中で、感情の波が次々とハリスに押し寄せた。しかし彼女は、自分はこれに参加する「資格がない」と考え、涙をこらえてビデオカメラを固定し続けた。

儀式の終盤、女性たちが一斉にリズムを刻みながら泣き始め、感情が最高潮に達した[24]。ハリスは涙を抑え込んだが、心にはある疑問が残った。2012 年８月、彼女がラヒレとその時の経験について語り合った際、ラヒレはこう明かした。自分も同じような場面では涙を抑えることができず、一緒に泣いてしまったのだと。すると、その場にいた女性たちは非常に喜んでこう言ったという。「見て、彼女こそが真のムスリムだわ！」



2005 年、新疆現地の披露宴で招待客にインタビューするラヒレ（中央）。（写真引用：Lisa Ross）

目の前の「個」としての人間に対する親密さこそ、ラヒレの本質であった。アキダの回想によれば、ラヒレは周囲の人々への気遣いを決して惜しまなかった。朝 9 時から夕方 5 時までの仕事を終えると、まず家族のために夕食を作り、その後、書斎にこもって資料の整理を続けた。「彼女は私がこれまでに会った中で、最も勤勉な女性でした。単なる仕事人間というわけではなく、料理も上手で社交的、人に対してとても誠実でした」とアキダは語る。親戚が病気で入院すれば、ラヒレは必ずアキダを連れて見舞いに行った。

---

[23] https://www.jstor.org/stable/43297444

[24] https://www.soundislamchina.org/?p=260&fbclid=IwAR0YkBjYcaE6scK-tFKmqEGmbO_g9mlfmai4MJfbgg3Y0NTPSp2hLp9Y-_k

ラヒレと教え子たちの関係も、家族のようだった。ラヒレは勤務時間外でも学生に会い、料理をたくさん作った日は電話で学生たちを自宅の食事に招待した。「教え子たちは彼女を単なる教師としてだけでなく、信頼できる母親のようにも慕っていました」

ラヒレが「強制失踪」させられてから８年が経つが、アキダは今でも「どうすれば立派な人間になれるか、どうすれば善良で、良い親族であれるか」を考えるとき、いつも母の言動を思い出すという。

「読者の方々に、彼女（ラヒレ・ダウト）を『過ちを犯した善良な女性』のように思ってほしくありません」とハリス教授は強調する。「私たちが語るべきなのは、凄まじいまでの不条理についてなのです」

ハリスはラヒレを含む多くのウイグル人学者と共同研究を行ってきたが、今やその協力者たちのほとんどが姿を消してしまった。「私たちが把握しているだけでも、約 200 人のこうした人々が逮捕されました」と彼女は言う。さらに広範囲にわたる拘禁は、一般の人々の身にも起きている。例えば、かつて村の客間で『コーラン』の読経の会を組織していた女性たちは、後に「過激思想」を抱いていると告発され、「再教育キャンプ」へと送られた。「彼女たちはただの平凡な女性たちです。集まって祈り、死後の天国を願い、家族や村の人々の幸福を祈っていただけなのです。それを封建的な迷信だと言うことはできても、テロ活動とは全くの別物です」

ハリスによれば、ウイグル人学者への大規模な拘禁は、中国政府が 2017 年前後を境に突如として許容範囲を狭めたことを示している。かつて政府に奨励され、資金援助さえ受けていた研究が、今や次々と「分離主義」の烙印を押されている。その背後にある理由は、おそらくそれらの研究がウイグル文化の「真実の姿」を語っていたからに他ならない。

彼女は、ラヒレが決して「分離主義者」などではなく、ただ権力側が彼女の研究に一寸の余地も残さなくなったのだと考えている。ハリスは、2019 年に習近平国家主席が新疆を視察した際、「中華民族共同体意識」と「各民族の大団結」を強調したことに触れた。彼女の目には、最高指導層からのこうした文化的「統一」の要求こそが、ラヒレに対し無期懲役という「めちゃくちゃ」な重刑が下された理由であると映っている。

「恐怖」に覆われた中で、ウイグル人はもはや祈ることも許されない。外部の人間にとって、何がこれほど巨大な文化的空洞を生み出したのかを理解することは、ますます困難になっている。学者のリアン・サム（Rian Thum）は、ウイグル文化は今や「中身を抜き取られた」状態にあると指摘した。「果実の中身が取り除かれ、外側の皮だけが残ったようなものです」。ハリスはこの表現に同意する。サムは、ウイグル人の文化の現状を「見世物」という言葉で形容している。文化は根こそぎにされ、人々と土地や歴史との結びつきは断たれた。残されたのは空虚な建物とパフォーマンスだけであり、観光客がその真の意味を理解することは不可能だ。

「そうです。もし今、カシュガルの旧市街へ行ったなら」とハリスは言う。「建物の外壁にはまだ多くの美しい装飾が残っているでしょう。しかし、あなたが見るものは実のところ、すでに破壊し尽くされた都市の姿なのです」



2009 年、カシュガルで旧市街改造プロジェクトが始動し、広範囲にわたって古い住居が取り壊され、その跡地には古風を模した建築物が新築された。写真は現在のカシュガル古城景勝地でのパフォーマンス風景。ダンス、音楽、伝統衣装が舞台へと移され、観光客のカメラに収まる「民族情緒」へと変貌している。学者サムはこの状態を「博物館化」と呼んでいる。すなわち、文化が日常生活から切り離され、展示と消費のための外在的な形式だけが残された状態のことである（写真引用：視覚中国）。

1966 年５月、ラヒレはウルムチの知

識人家庭に生まれた。イデオロギーによる高圧的な検閲と、ウイグル族としての幾重もの困難に直面するなかで、彼女の一族は「柔軟な」姿勢で安定した生活を求める術をとうの昔に身につけていた。ただ彼女にはウイグル文化を記録に残したいという、ささやかな、しかし切実な願いがあった。

「自分を否定せず、その場所（新疆）に留まり続ける限り、行き着く先は監獄か死のどちらかしかない」。ウイグル人知識人が直面する苦境について、イルシャット・ココボレ（Ilshat H. Kokbore）は「WOMEN（我門）」に対し、生き延びる道は亡命しかないように見えると語った。しかし、長年の亡命生活を経て、年齢を重ねるにつれ、彼は悲観的になっていったという。「その（亡命という）結末を改めて考えると、それもまた、わずかに情緒的な響きを帯びた悲劇に過ぎないのではないかと思えるのです」

ラヒレは新中国成立後、博士号を取得した最初期のウイグル人女性の一人であり、かつては地元の婦人連合会からも模範として称えられていた。夫のハイウィズラ・プラットは新疆文芸界連合会のメンバーであり、かつて『天山（Tengritagh / テングリタグ）』という雑誌に携わっていた。この雑誌名は元々ウイグル語で表記されていたが、2021 年からは漢字名の『天山文芸』へと改称されている。



『天山文芸』2021 年３月号（写真引用：ネットワーク）。

「彼女の研究はすべて国家の指針を尊重したものでした。政府が（内容を）デリケートだと判断して承認しなければ、母に研究の機会は与えられなかったのです」。ラヒレが失踪して間もない頃、アキダはまだ冷静さを保とうとしていた。彼女はただ待ち続けた。３ヶ月が過ぎ、さらに６ヶ月が過ぎた。ビデオ通話越しに見る父と祖母の表情は、日を追うごとに悲しみを深めていった。

ラヒレの一人娘として、アキダはこの８年間、警察から母に関するいかなる情報も得られず、拘束や逮捕、起訴、判決に関わる一切の公文書を目にすることもできなかった。その間に祖母は他界し、父親はアキダが海外で母のために声を上げ続けていることを理由に、彼女との連絡を絶った。

漂泊の身となって初めて、アキダは「ウイグル人であること」が何を意味するのかを真に理解し始めた。2025年12月12日、ラヒレの拘束から８年が経過した際、彼女は追悼の手記にこう記している。[25]

「母の失踪は、私が想像だにしなかった方法で責任と向き合うことを強いました。以前の私は、政治とは全く無縁の人間でした。しかし母の失踪が私を突き動かし、人権のために声を上げさせたのです。異国の地で孤独に暮らしながら、自らの生活を築きつつ人権を擁護していくことは、決して容易なことではありません。それでも私は、母が釈放されるまで、そして母の声が——彼女のような他の人々の声と共に——再び聞き届けられるようになるまで、歩みを止めるわけにはいかないのです」

（本稿の作成にあたって風思雨の協力を得た。）

---

[25] https://kashgartimes.substack.com/p/akida-polat-rahile-dawut-eight-year-anniversary